

8月6日 AM6:30 豊科駅北、県安曇野庁舎駐車場に、参加者17名が集合。タクシーバスを貸し切り、一ノ沢登山口へ向う。AM7:15 準備を整え、登山口から一列縦列で登山開始。上空は曇天模様、登山口から10分、樹齢400年の椴ノ木を祀る「山の神」で手を合わせ、登山の安全を祈願する。ここから溪流左岸沿いのコマドリが鳴く森林帯の中、緩やかな登りの登山道を進む。



森林帯の中、緩やかな登りの登山道を進む



ニッコウキスゲ



オオバギボウシ



右岸沿いの河原を登る

1時間程登った所で2名が筋肉痛を訴えた為、水分補給、ストレッチやマッサージを行なう。快復が長引く事を懸念し、ゆっくり登って来てもらう事とし、元気な2名が付き添い、計4名を後発隊とする。先発隊の13名は、AM10:15 一ノ沢支流が合流する笠原沢出合に登り出る。小休止後、一旦対岸に渡り急坂を20分登り、再び左岸に戻り、しばらく河原を登ると山腹を巻く胸突き八丁にたどり着く。山腹の斜面には、オオバギボウシ、ニッコウキスゲの花々が咲き競う。この頃から、雨が強く降り出した。

左岸沿いの山腹の巻き道を登り続けると AM11:35 最後の水場に到着する。ここから森林帯の中の急坂をひたすら登る。第一、第二ベンチで休憩しながら高度を上げる。あいにく霧雨が覆い視界が効かない。低木帯を抜け、這松帯が見えてくると PM12:40 ようやく常念乗越に登り出る。



森林の急坂を登る



キバナシャクナゲ



ミヤマダイコンソウ



ようやく常念乗越に登り出る

雨の常念小屋に、逃げ込むように玄関口から入り込む。登山者でごった返す小屋内で、濡れた衣服を着替え等して遅い昼食を摂る。この頃から、雨も本降りとなり、窓外の軒先から音を立てて、雨水が勢いよく流れ落ちている。予定していた横通岳への登山は中止とし、室内で登り方などの注意や心得等の講習を行う。PM2:45 雨の中、4名の後発隊が、ようやく到着する。

夕方、雨が上がる。夕食後、日暮れると夜空に夏の星座が瞬く。天頂に白鳥座が光り、天の川が流れ、その両岸に織姫、彦星の星々が輝き、夏の大三角を形作っている。北の空に、北斗七星を発見し、それを頼りに北極星を探す。見つめる夜空に一瞬、尾を引いて流れる星を見つけ、歓声を上げる。



夕方雨が上がり、常念岳を望む



7日早朝、槍ヶ岳を望む



稜線越しに北穂高岳を望む

7日早朝、東に雲海が広がり、その上空に漂う雲を彩りながら朝陽が昇る。西に槍ヶ岳から穂高岳の重厚な岩峰が連なり、薄っすらと紅色に染まる。上空は青空が覗く薄曇、無風の静かな朝を迎える。AM6:30、参加者17名全員が軽荷で常念岳山頂を目指す。花崗岩石がゴロゴロと積み重なった、急傾斜の登山道を登る。所々の岩陰にミヤマダイコンソウ、這松の陰にキバナシャクナゲが咲いている。

西に望む槍ヶ岳の穂先に筋雲が漂い始めると、常念岳東側の沢から霧が覆い始め、あっという間に、私達の視界を遮ってしまった。霧が漂う岩稜線を登り続けると、9合目付近でメスの雷鳥が、その姿を現した。まるで常念岳の住人のような、威風堂々とした風格を備えている。そして見上げると、積み重なった花崗岩石の頂上はすぐそこだ！。一步一步登り詰め、AM8:15常念岳山頂2857mに全員見事登頂する。「おめでとう」「バンザイ！」。



急傾斜の登山道を登る

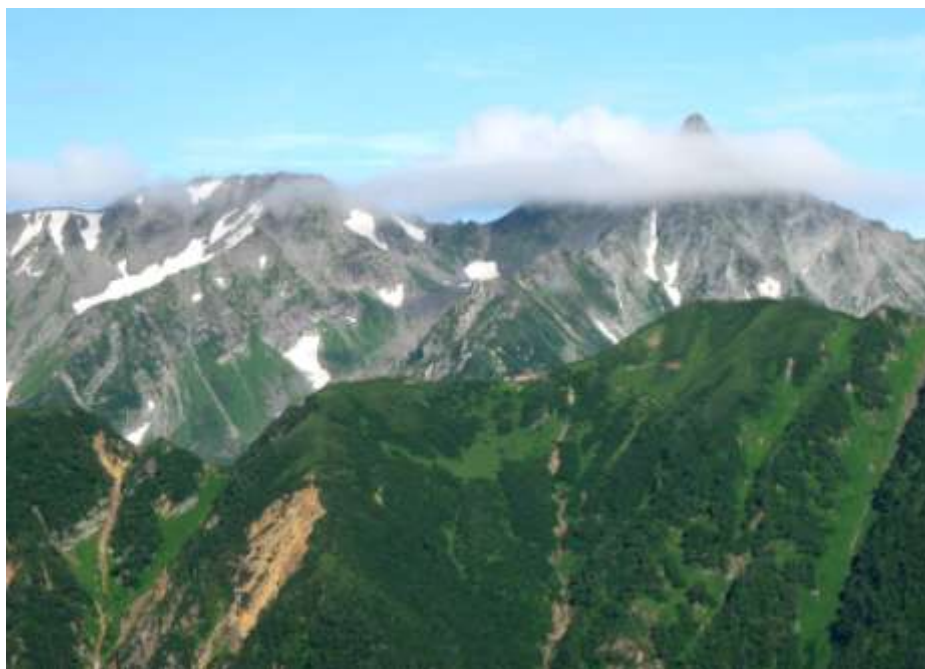


9合目付近を登る



常念岳 2857mに見事登頂

頂に建つ祠の下で、全員憩いのひと時を過ごす。東、南、北方向の遠望は効かないが、西側は屏風岩から穂高岳涸沢の雪渓が、霧の合間から微かに望まれる。30分程頂上に留まり、下山を始める。AM10:15常念小屋に引き返す。小屋内では早めの昼食を摂り、準備を整えAM11:15下山を開始する。



西岳の稜線の後方に、筋雲が漂う槍ヶ岳 3,180m

下山ルートは往路と同じ道を引返す。最初17名全員で、危険箇所の胸突き八丁下部まで降り、そこから後発隊4名は時間をかけて降りる事とし、先発隊13名は、先を急ぎ、PM2:45登山口に到着。待機しているタクシーバスに乗り込み、参加者の車の待つ県安曇野庁舎駐車場に向かいPM3:30解散とした。又後発隊は、PM5:10無事登山口に到着。MHC迎いの車で同駐車場に行き、最終解散とした。

「いつかは登りたいと誰もが憧れる常念岳。どんな艱難辛苦があっても、その頂を目指す情熱を失わなかった参加者の皆様に、心から拍手を送りたい。」登山だった。